

# 福島「財がゴール」



【女子100m決勝】11秒45で優勝を決めた福島千里はゴール後、満足そうな表情を浮かべる (大賀章好撮影)

## 女子100V7 3度目五輪切符

### 陸上日本選手権

【愛知】陸上競技の第100回日本選手権大会(日本陸上競技連盟主催)第2日は25日、名古屋市のパロマ瑞穂スタジアムで行われ、女子100m決勝は福島千里(北海道ハイテクAC)が11秒45で7年連続8度目の優勝を決め、ブラジル・リオデジャネイロ五輪出場を決めた。このほか十勝関係選手では、男子走り幅跳びの小西康道(白樺AC)と東海大、白樺学園高出が7秒57で7位入賞。女子砲丸投げの阿原典子(日大桜門陸友会)と大田大、帯広高出は14秒15で10位だった。

## 加速で圧倒 節目に最多記録

### 周囲の支え「幸せ」



【女子100m決勝】優勝を決めた福島千里(中央)はゴール後、満足そうな表情を浮かべる。左は2位の齋藤愛美(右は3位の世古和)

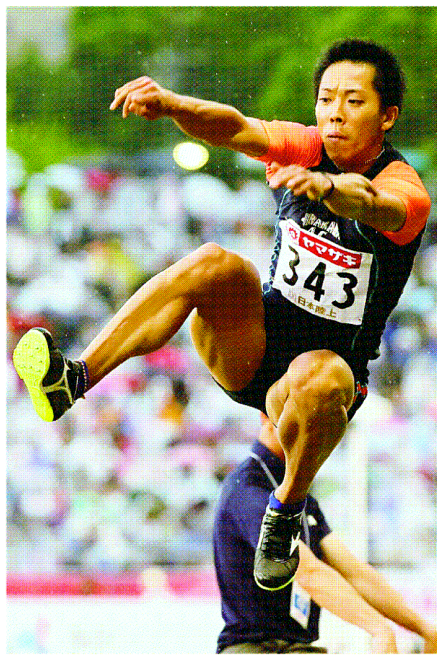
降りしきる雨を切り裂き、福島千里が女子100mで7連覇、通算8度目の優勝を飾った。1998年から新井初佳(ビップロジモト)が記録した7連覇と並び、節目となる第100回大会で優勝回数での最多記録を打ち立てた。他を圧倒する走りでも2万3500人の大観衆の歓声とため息を誘い、「節目の大会で連覇ができたことは光栄」とはにかんだ。

レースではなかったと反省したが、五輪切符をつかんだことで自然と笑みが浮かんだ。「優勝できたのは監督をはじめとしたチームのおかげ。連覇を重ねることに応援し、支えてくれる人が増える実感があふれる。最近『大丈夫だから』と頑張る『と皆さんにたくさん言ってもらえる。とても幸せです』。勝利を重ねても、当然とみられるプレッシャーがあった。それでも多くの人が重圧を肩代わりし、偉業へ導いてくれた。北京、ロンドンの面五輪とも100mは予選落ち。この大会が目標ではなく、あまのりかかゴール。そこに向けて、この大会に向けて努力していく。納得のいくレースをして、行けるところまで行きたい。雪辱の舞台へ。再びスタートラインに立った。

9秒台が期待された男子100mはジャマイカ人の父を持つケンブリッジ飛鳥(ドーム)が10秒16で初優勝し、五輪代表に決まった。山根亮太(セイコー)が10秒17で2位。桐生祥秀(東洋)は10秒31で3位に終わったが、既に日本陸連が定める五輪派遣設定記録の10秒01をマークしているため、代表入りが決まった。ケンブリッジ、桐生とも初の五輪出場となる。レースは向かい風0.3m/sの条件

だった。男子やり投げは日本陸連の五輪派遣設定記録を突破していた新井涼平(スズキ浜松AC)が45秒35で初優勝し、同400m障害を初制覇した野沢啓佑(ミズノ)が45秒54で3連覇し、初の五輪代表に決定。同400mは父がジャマイカ人のウォルシュ・ジュリアン(東洋)が57秒88で2位に入り、2大会連続の代表入り。同3000m障害は高岡沢安珠(松山大)が9分4秒22の大会新記録で2連覇し、初の代表に決まった。

## 小西(白樺)健闘7位 男子走り幅跳び



【男子走り幅跳び決勝】7m57の跳躍で7位入賞を決めた小西康道(大賀章好撮影)

## 盟友と共闘 4位と8m差

男子走り幅跳びの小西康道は、4年ぶりの日本選手権で7位。ロンドン五輪の選考会を兼ねた当時は14位だっただけに「ミスもあり、メダルには届かなかったが、けが続きでようやく出場できた大会で入賞できたのは大きい」と充実した表情だった。この日は白樺学園高時代の同級生で美業団選手として活躍する皆川澄人(小島)が多かった中、「条件は一緒。全然気にならなかった」と3回目までの跳躍で7位57と6位に付けた。その後、2度のファウルなどで記録は伸びなかったが、4位とわずか8m差と存在感を示した。この日は白樺学園高時代の同級生で美業団選手として活躍する皆川澄人(小島)が多かった中、「条件は一緒。全然気にならなかった」と3回目までの跳躍で7位57と6位に付けた。その後、2度のファウルなどで記録は伸びなかったが、4位とわずか8m差と存在感を示した。この日は白樺学園高時代の同級生で美業団選手として活躍する皆川澄人(小島)が多かった中、「条件は一緒。全然気にならなかった」と3回目までの跳躍で7位57と6位に付けた。その後、2度のファウルなどで記録は伸びなかったが、4位とわずか8m差と存在感を示した。

## ケンブリッジで代表

### 男子100 桐生3位、五輪確定



男子100m決勝でゴールする優勝のケンブリッジ飛鳥(中央)、2位の山根亮太(右)、3位の桐生祥秀(左)。愛知・パロマ瑞穂スタジアム(時事)

日本人初の9秒台に向け、激しいばせり合いを演じてきた桐生と山根の両雄を見事に浮き抜いた。男子100m決勝は、進境の強さを発揮して優勝。日本人最速の称号を手にしてリオデジャネイロ五輪代表の座も射止めた。「イメージ通りの走りが出てきた」と会場の笑みを浮かべた。桐生と山根に挟まれた5レーン。「最初は2人に行かれるだろう」と展開を想定し、序盤に離されても慌てなかった。もともと0.0秒が得意だった「後半型」。じわじわ追い上げてきた。後半の走りに磨きがかかり、5月には自己ベスト

を更新する10秒10を記録。手応え十分で頂上決戦に臨んだ。男子短距離の国内トップランナー2人を倒したことで、リオ五輪に向けて注目度が増すのは間違いない。23歳は「初めての五輪を楽しんで、一つでも多く走りたい。本番が待ち切れない様子だった。無念さ残り涙 桐生」

## 阿原(高出)10位

### 新投法へ「手応えある」

女子砲丸投げの阿原典子は昨大会に続き10位に終わった。14秒15で4投目以降に進めず「自己ベスト(14秒88)にも届かなかった」と4年前に4位に入った実力者は肩を落とした。昨年11月に東京で女子7人制ラグビーのリオデジャネイロ五輪アジア予選を観戦。帯広高時代の2年先輩となる桑井亜乃(アルカス熊谷)がブレーする姿を見て「競技は違っても、やりかたは一緒だ。白樺学園高時代に練習していた投げ方にならなくて、足から力を伝える投げ方へと改良の途中だ。今回は従来の投げ方と新しいスタイルがまじり切らなかったが、手応えはある。一つひとつ改善していけば記録は伸びること信じた道を突き進む。

【女子砲丸投げ決勝】阿と原典子は14秒15で10位になった(大賀章好撮影)

【男子】7000m障害①ケンブリッジ飛鳥(ドーム)10秒16②山根亮太(セイコー)10秒31③桐生祥秀(東洋)10秒31④スズキ浜松AC⑤新井涼平(スズキ浜松AC)10秒31⑥ケンブリッジ飛鳥(ドーム)10秒16⑦山根亮太(セイコー)10秒31⑧桐生祥秀(東洋)10秒31⑨スズキ浜松AC⑩新井涼平(スズキ浜松AC)10秒31

突破して優勝する勝負強さを見せ、代表に決まった。最後の最後はうれしい。鳥肌が立ったと全身喜びを表現した。45秒40の参加標準記録は、今季何度も挑戦しては、はね返されてきた厚い壁。それを信じて、(五輪に)行けると思った。前半から強気に攻めて課題の終盤も持ちこたえ、45秒35でゴールした。「リオでは決勝に残りたい」と高い目標に掲げた伸び盛りの19歳。昨年まで11連覇した金丸祐三に代わり、新鋭が存在をアピールした。出るからにはメダルという結果でリオ五輪を決めることができよう。五輪に「出るからにはメダルを狙う。さらにステップアップしないと行けない。